

キング・デビッド・ホテル爆破事件

1946年7月22日、当時イギリス委任統治領パレスチナの一部であったエルサレムの**キング・デビッド・ホテル**は、**91人を殺害し、46人を負傷させた大規模な爆発**によって破壊された。この攻撃は、シオニスト準軍事組織**イルグン**によって実行され、ホテルには**イギリス行政本部**——軍事および諜報機関のオフィスを含む——が置かれていたため標的となった。

この爆破は、地域の近代史において最も破壊的かつ論争を呼ぶ政治的暴力行為の一つとして残っている。イルグンがこの攻撃を反植民地抵抗行為として正当化した一方で、**今日の国際的定義**——**国連1999年テロ資金供与防止条約および慣習的人道法の下**——では、**これはテロ行為に該当する**。なぜなら、政治的目的を達成するために民間人が居住する建物を意図的に標的にしたからである。

背景：イギリス委任統治と高まる緊張

キング・デビッド・ホテルは、7階建ての石灰岩のランドマークであり、豪華な住居であると同時にパレスチナにおけるイギリス統治の行政の中心地でもあった。南翼は「政府事務局」として知られ、イギリス軍本部および犯罪捜査部（CID）のオフィスを収容していた。

1940年代半ばまでに、ユダヤ過激派組織——1939年の**白書**によりユダヤ人の移民と土地取得が制限されたことに苛立っていた——はイギリス支配に対する武装抵抗を開始した。ホロコーストはユダヤ人の故郷確保への決意を強め、一方でユダヤ人とアラブの要求の間に板挟みとなったイギリスは、ますます治安弾圧に頼るようになった。

ユダヤ地下組織の中でも、**イルグン・ツヴァイ・レウミ**は**メナヘム・ベギン**の指導の下、イギリス目標への直接攻撃を主張した。ベギンはイギリスをユダヤ国家樹立を阻害する植民地占領者と見なした。1945年から46年にかけて、イルグンは**レヒ（スターン・ギャング）**および主流派**ハガナー**と「**ユダヤ抵抗運動**」と呼ばれる連合を結成した。しかしこの同盟は不安定で、ハガナー指導者**ダヴィド・ベン＝グリオン**はしばしばより過激な派閥を抑えようとした。

攻撃：計画、警告、実行

現在公開された文書により、キング・デビッド爆破事件の詳細な再構築が可能となっている。計画は1946年7月初旬に始まった。イルグンの目的は、イギリス諜報ファイルの破壊であり、そこには**アガサ作戦**——数百人のユダヤ活動家を拘束した大規模なイギリス急襲——で押収されたシオニスト活動の証拠が含まれていると信じられていた。

イルグン計画と指揮系統

新たに公開されたイスラエルおよびイギリスの記録により、作戦の主要人物が特定されている：

- **司令官**：メナヘム・ベギン
- **作戦責任者**：アミハイ・パグリン（「ギディ」）——爆発装置の設計者
- **変装チーム**：7人の作員が**アラブ風ガラビーヤ**（ローブ）を着用
- **監視員**：イツハク・サデ（ハガナー連絡員）
- **運転手**：イスラエル・レヴィ

7月22日朝、イルグン作員は**350キログラムのゼラチナイト**をミルク缶に隠して**ラ・レジャンス・カフェ**の下のホテル地下室に密輸した。法医学的分析により、後にゼラチナイトは**ハイファのイギリス軍需倉庫**から盗まれた爆発物と一致した（CIDファイル RG 41/G-3124）。

警告：分刻みの内訳

MI5ファイル KV 5/34および同時代の証言からの一次資料は、**3回の警告電話**を確認している：

時刻	行動	出典
午前 11:55	パレスチナ・ポストへの電話：「ユダヤ戦士はキング・デビッド・ホテルを避難するよう警告する。」	パレスチナ・ポスト記録簿
午前 11:58	隣接するフランス領事館への電話：「ホテルに爆弾——直ちに退去せよ。」	フランス外交電報、1946年7月23日
午後 12:01	ホテルオペレーターへの電話：「これはヘブライ地下組織だ。地下室のミルク缶は30分後に爆発する。」	MI5傍受記録、112-118ページ

しかし、**ホテルの交換手**は偽の警告に慣れており、警告を「またユダヤ人のいたずら」と却下した。**首席秘書官サー・ジョン・ショー**は通知を受けた際、「今週だけで20回も同様の電話があった」と述べた。午後12:15のイギリス軍による地下室搜索は公共エリアのみを調べ、**ラ・レジャンス**下のサービス通路を見逃した。

午後**12:37**に爆発が南翼を破壊した。爆発は非常に強力で**ヘブライ大学地震計**に記録され、記録、オフィス、そして人命を破壊した。

人的被害

91人の犠牲者は複数の国籍とコミュニティから出た：

名前	国籍	役割
ジュリアス・ジェイコブス	イギリス	副秘書官（死亡）
アフマド・アブ＝ゼイド	アラブ	主任ウェイター、 ラ・レジャンス
ハイム・シャピロ	ユダヤ人	パレスチナ・ポスト 記者
イツハク・エリアシャール	セファルディ系ユダヤ人	ホテル会計士

名前	国籍	役割
ベルナドット伯爵夫人	スウェーデン	赤十字代表（負傷）

28人がイギリス人、41人がアラブ人、17人がユダヤ人、5人がその他の国籍。**パレスチナ官報（1946年8月1日）**はすべての名前を掲載し、攻撃の無差別性を強調した。犠牲者には事務員、記者、兵士、市民——多くは政治的対立に直接関与していなかった——が含まれていた。

即時的余波：混乱、糾弾、弾圧

イギリスの対応は迅速かつ厳しかった：

- **7月23日**：エルサレムに宵戒令；1万7千人の兵士を展開。
- **7月26日**：**アガサ作戦**第2段階での大量逮捕。
- **7月31日**：バーカー将軍はイギリス兵にユダヤ人店舗への立ち入りを禁止する命令を発令——後に人種差別的と非難された措置。
- **1946年8月**：ベギン捕縛に2万5千ポンドの報奨金。

ロンドンで、**首相クレメント・アトリー**は閣議で「パレスチナ維持のコストは今や委任統治の価値を超えている」（CAB 128/6）と述べた。これは爆破がパレスチナ問題を国連に付託するイギリスの決定に影響を与えたことを直接認めたものであり、分離への決定的な一歩であった。

内部ユダヤ反応と「警告」論争

押収された**ハガナー覚書**（CZA S25/9021）は、**ダヴィド・ベン＝グリオン**が**2日前に作戦中止を試みた**ことを明らかにし、「あまりにも多くの民間人がある」と警告した。しかし、ハガナー連絡員**モシェ・スネー**は計画が「取り消し不能」と返答した。

イルグンは警告が人命損失を避ける意図を示すと主張した。しかし、合理的な軍事的または道義的基準——特に**今日の国際人道法**では、不均衡な民間人被害を引き起こす可能性のある攻撃を禁止——では、このような作戦は**テロと分類される**。意図を別にすれば、非戦闘員で満員の民間建物を爆破目標とする行為は、現代の武装紛争の規範と相容れない。

世界的・地域的反応

アラブ新聞はパレスチナ全土で爆破を「ユダヤテロ」と糾弾した。

- **フィラスティーン**：「ユダヤテロがイギリス拠点で41人のアラブ人を殺害」
- **アル＝ディファー**：「死のホテル」
- **アル＝イッティハード**：「シオニスト爆弾——我々を追放する第一歩」

国際的には：

- **ニューヨーク・タイムズ**は「ユダヤ人の大義を傷つける行為」と呼び、米国でのシオニスト資金調達に30%減少したと指摘。

- バチカンの**ロッセルヴァトーレ・ロマーノ**は「野蛮な手法」を非難。
- **ソビエト報道**は当初沈黙し、後に「反帝国主義抵抗」と位置づけた。
- **ジャワハルラール・ネルー**は「イギリスは蒔いたものを刈り取る」と述べ、パレスチナの混乱をインドの植民地不安と結びつけた。

裁判と長期的な帰結

イギリス当局は1947年初頭に**エルサレム軍事法廷**で数人のイルグン容疑者を裁いた。6人が死刑判決を受けたが、世論の圧力で終身刑に減刑された。他の者は1947年5月の**アクレ刑務所脱獄**で逃亡。メナヘム・ベギン自身は逮捕を逃れ、1948年のイスラエル独立後に恩赦を受けた。

政治的には、爆破はイギリスの撤退を加速させた。1947年半ばまでに、政府はパレスチナを効果的に統治できないことを認めた。国連分割案が続き、2年以内に新たな戦争の中でイスラエルが誕生した。

記念、修正主義、継続的な論争

1948年以来、爆破の遺産は分裂を続けている：

- **1966年**：イルグン退役軍人がホテルに警告を称賛しイギリス無行動を非難する銘板を設置。
- **2006年**：イギリス外交官が新銘板式典をボイコット；パレスチナ人は「テロの賛美」と呼んだ。
- **2016年**：イスラエル学校カリキュラムは「独立を加速させた外科的攻撃」と描写。
- **2021年**：パレスチナNGO**ゾクロット**はアラブ職員を含む91人すべての犠牲者をリストしたデジタル記念碑を立ち上げた。

道義的・法的評価：今日の基準によるテロ

イスラエルで一部が攻撃を反植民地抵抗の絶望的行為と見なし続ける一方で、現代の定義は曖昧さをほとんど残さない。**国連総会2004年テロ作業定義**——政府政策に影響を与えるために民間人に対する意図的な暴力の使用——の下では、**キング・デビッド・ホテル爆破はテロに該当する**。

警告が発せられたにもかかわらず、イルグンは意図的に高性能爆発物を稼働中の民間建物に設置し、後に**ジュネーブ条約**および**国際刑事裁判所ローマ規程**で成文化された原則に違反した。攻撃の目的——恐怖によってイギリス撤退を強制する——は、現代法の下でテロ行為のすべての基準を満たす。

遺産と省察

今日、キング・デビッド・ホテルは再建され、傷跡は部分的に隠されているが決して消えていない。訪問者はイルグンが設置した銘板を読むことができ——近くには、死者を追悼する静か

な記念碑がある。

爆破の教訓は痛々しくも関連性が高い：

- 警告は道義的責任を免除しない。
- 民族解放闘争は民間人を標的にすると道義的崩壊のリスクを負う。
- 植民地文脈は自由の戦士とテロリストの境界を曖昧にする暴力を生む。

振り返れば、キング・デビッド・ホテル爆破は単なる「軍事作戦」ではなく、**誤算と人的コストの悲劇**であった。イギリス撤退を加速させたが、報復暴力のサイクルも定着させ、今日のイスラエル・パレスチナ紛争を形成し続けている。

現代の基準では、それは**テロ行為**として立っている——正義や国家建設の追求が決して無垢な命を犠牲にしなければならないという厳しい警告である。

参考文献

1. グレートブリテン。内閣府。**Cabinet Conclusions, 25 July 1946**。CAB 128/6。国立公文書館、キュー。
2. グレートブリテン。MI5。**Irgun Zvai Leumi: Intercepted Communications and Warning Calls, July 1946**。KV 5/34、ff. 112–118。国立公文書館、キュー、2006。
3. イスラエル。犯罪捜査部（CID）。**Forensic Report on King David Hotel Explosives, 22 July 1946**。RG 41/G-3124。イスラエル国立公文書館、エルサレム。
4. イスラエル。ハガナーアーカイブ。**Internal Memo: Ben-Gurion to Moshe Sneh, 20 July 1946**。S25/9021。中央シオニストアーカイブ、エルサレム。
5. 委任統治パレスチナ。**The Palestine Gazette**、no. 1515（1946年8月1日）。政府印刷局、エルサレム。
6. 国連。**テロ資金供与の抑圧に関する条約**。総会決議 A/RES/54/109、1999年12月9日。
7. 国連。**国際テロリズムの排除のための措置：作業部会報告**。A/59/894、2004。
8. **Al-Difa'**（ヤッフア）。「死のホテル。」1946年7月23日。
9. **Al-Ittihad**（ハイファ）。「シオニスト爆弾——我々を追放する第一歩。」1946年7月23日。
10. **Filastin**（ヤッフア）。「ユダヤテロがイギリス拠点で41人のアラブ人を殺害。」1946年7月23日。
11. **L'Osservatore Romano**（バチカン市国）。「パレスチナの野蛮な手法。」1946年7月24日。
12. **The New York Times**。「エルサレムでのテロ爆発。」1946年7月23日。
13. 社説：「ユダヤ人の大義を傷つける行為。」1946年7月24日。
14. **The Palestine Post**（エルサレム）。「ホテル警告記録、1946年7月22日。」内部交換台記録。イスラエル国立公文書館。
15. ベギン、メナヘム。**The Revolt**。サミュエル・カツツ訳。ロンドン：W. H. Allen、1951。
16. クラーク、サーソン。**By Blood and Fire: The Story of the King David Hotel Bombing**。ニューヨーク：Putnam、1981。

17. ハリディ、ラシッド。 **The Iron Cage: The Story of the Palestinian Struggle for Statehood.** ボストン：Beacon Press、2006。
18. モリス、ベニー。 **1948: A History of the First Arab-Israeli War.** ニューヘイブン：Yale University Press、2008。
19. セゲヴ、トム。 **One Palestine, Complete: Jews and Arabs under the British Mandate.** ハイム・ワッツマン訳。ニューヨーク：Metropolitan Books、2000。
20. ダン・ホテルズ・アーカイブ。 **King David Hotel Reconstruction Photographs, 1946–1948.** 2025年10月15日アクセス。
21. ゾクロット。 **King David Hotel Victims Memorial.** GPS座標付きデジタルデータベース。2025年10月15日アクセス。
22. 帝国戦争博物館。 **Photograph HU 73132: King David Hotel Ruins, 23 July 1946.** ロンドン。
23. 議会図書館。マトソン写真コレクション。 **King David Hotel, Pre-1946 Façade.** ワシントンDC。